

SONRISA

そんりさ

Vol.146



グアテマラ視察報告

コナビグア創設25周年の儀式

「そんりさ」「微笑み」を意味します。様々な活動を通じて、中南米の人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|----|-----------------------|-------------|
| 02 | グアテマラ視察報告 | ……新川志保子 |
| 06 | グアテマラ・天然染色研修センター開設 | ……村岡貞夫 |
| 08 | ニカラグア便り 学校選びは難しい | ……田中紀子 |
| 10 | CLIJAL活動から「シピティオ」を求めて | ……網野真木子 |
| 11 | ラ米百景「キューバ外相、フィデルを語る」 | ……伊高浩昭 |
| 12 | 音楽三昧♪「ペルー・ロックの曙」 | ……水口良樹 |
| 14 | メキシコ食巡り「牛肉のピーマン炒め」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 15 | ニュースクリップ | ……サザエ |

2013年12月7日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

グアテマラ視察報告

新川志保子

さる9月にレコム・グアテマラ視察を行ったので、以下のその報告をします。視察はグアテマラ在住の石川智子さん、今回初参加の松井京子さんと行いました。

グアダルーペ組合

チマルテナンゴ県ポアキルのグアダルーペ組合を訪問。運営委員会のメンバーと会合を持ち、春に訪問してからのことなどを聞く。その後で土曜学級を訪問した。土曜学級は2012年より大阪司教区シナピスこども基金からの支援で始めたもので、ポアキル市の町なかで1カ所、パラマとパネヤという村でそれぞれ1カ所、計3カ所で毎週土曜日に行っている。1クラス35人の子どもを受け入れて、就学前から小学校3年までの授業を行う。給食も出す。

三つのクラスは内容も充実して全体にうまくいっている。子どもたちが元気な声で挨拶したり質問に答えたり、活発にやっている。クラスに来ている子どもたちは小学校の成績も上がっており、家庭でも覚えた事を話すなど、親も子どもが積極的に学力が上がっていると実感しているということだ。それにつれ、子どもだけでなく親の意識も変わりつつあり、以前に比べて教育の必要性を実感しているという。



土曜学級 パラマ村の歓迎会

だが問題もある。一つは物価が上がっていること。それが給食の材料費や教材購入にひびいている。グアダルーペ組合が不足分をなんとか補ってやりくりしているが、来年は同じ人数の子どもを引き受けられないだろうとのことだった。家庭の経済的な事情などで学校に行けない子どもにとって、この土曜学級が唯一学べる場所なので、受け入れ数を減らすのは心苦しいのだが……ということだった。私たちの滞在中にも、物価高騰が連日のようにニュースになっていた。石油の値上がりが他の物価すべてに影響しているという。

もう一つの問題は、パネヤ村でのクラスで、学校の施設を使わせてもらえないなどの嫌がらせを受けていることだ。そもそもこの土曜学級を始める時に教育省と村役場にも届けて認可をうけており、場所は小学校のクラスを使わせてもらうということで了解が取れていた。だが昨年市長が替わってから、状況が変わり始めた。現在の市長は与党愛国党で、就任するや市庁舎の壁画（若者グループのイニシアティブでポアキルの歴史を描いたもの。内戦で多くの人が殺されたことも描かれている。グアダルーペ組合もこれに協力した）を塗りつぶした人間だ。グアダルーペ組合の活動を快く思っておらず、公に批判もしている。そしてパネヤの小学校長は市長と近く、おそらくその関係もあって、ここ数カ月小学校



パネヤの土曜学校

の教室を使わせてもらえないが続いているという。グアダルーベ組合が市にかけあっているが、いつもののりくらりと逃げられて解決しない。とりあえずは、村の集会所を使って授業をしているとのことだった。

私たちが訪問した時は、到着してから小学校の鍵が届けられて時間より遅れて授業が始まった。おそらく外からの訪問があることがわかってあわてて教室に入れてくれた模様だ。そのため始業時間が遅れたり、集会所に集まった子どもを小学校に移したりと少し混乱した。一番影響を受けるのは子どもたちで、かわいそうなことだ。

マイクロクレジット

農村部女性の経済的自立のために始めたマイクロクレジットは、受益者女性が去年の8人から今年は15人に増えた。昨年の助成金36万円の元金にグアダルーベ組合が1万ケツアル（約13万円）追加し、受益者を増やした。お金を借りた人は糸（ポアキルは織物をする女性が多い）を仕入れて村で売ったり、小間物屋を始めたりしている。事前に商売や返済の見通しなどを細かく確認しているため、これまでの返済率は100%だ。

逆にますます縮小しているのが織物・民芸品の制作・販売だ。売り上げが落ちる一方で、以前はあった店も閉めてしまった。今は発注があるときだけ生産しているという。グアダルーベ組合のように首都から交通の便が悪い田舎の町は、たとえ質のよいものを作っても観光客にアクセスできない。

このような状況で、協同組合として収入を上げるためにいろいろな工夫をしている。その一つが銀行の窓口代行だ。銀行の窓口はいつも混んでおり長い列ができる。それを解決する手段のひとつで、小切手の現金化などの業務を代行し、1回につき1.5ケツアル（約20円）の手数料をもらうというものだ。その業務を行う認可も取ったという。

戦時下性暴力裁判関連

関係団体のグアテマラ女性連合UNAMGとメンタル・ヘルスのECAPを訪問。ジェノサイド裁判の有罪判決が覆されてしまったので（そんりさ143号参照）、しばらく状況を静観していた。共同告訴をしている女性たちも非常にながかりしたが、自分たちの裁判は続けるという強い意志を持ち続けているということだ。来年早々に加害者の逮捕、公判を始めたいため、専門家証言の準備をしているという。社会心理や文化、ジェンダー、軍事戦略など8分野の専門家が証言することになっている。

国内での裁判と並行して、戦時下性暴力について国家の責任と補償を要求するために米州人権委員会への提訴も行っている。

今年NPO法人アルシュの会・かけはし基金から10万円の助成金をいただいたが、これは戦時下性暴力の被害女性プロジェクト（アルタ・ベラパス、チマルテナンゴ、ウエウエテナンゴの3地域）に参加しているアルタ・ベラパス県ケクチ語地域の女性たちのエンパワーのために使われることになった。女性たちが独自の価値観に基づいて分析・判断する能力を強化する研修を施すもので、すでに5月と7月に各2日間のリーダー研修が首都であった。研修を受けたリーダーたちは自分のコミュニティに戻って集会を開き、習得したことを仲間と共有する。研修講師やプロモーターがこれに同行し、習得度を確認しながらサポートする。10月にはこれら3地域の女性がキチェ県ネバフに出かけ、新しく参加したこの地域の女性と交流し経験を共有する集まりも持った。

警察歴史文書館

Archivo Historico de la Policia Nacional(AHPN)

今回の視察の大きな収穫は警察歴史文書館を見学できたことだ。職員のアルベルト・フエンテスさんが解説してくれた。

36年におよぶグアテマラ内戦で、軍によるさまざまな人権侵害はよく知られているが、軍が警察をしのいで圧倒的な権力を行使するようになったのは1980年すぎ、農村部での焦土作戦などを展開するころと思われる。それまでは警察が軍事政権の手先となって殺害や拉致をしていた。例えば80年のスペイン大使館占拠事件（注1）や労働運動のリーダーが一挙に27人行方不明になった事件などは軍の関与はなく警察によるもの。その後も農村部では軍が、都市部では警察という役割分担ができていたが、80年以降は警察が軍の指揮系統に従うかたちでオペレーションが行われたという。

1996年12月に内戦が終了し、和平協定でその設立が決められていた国連真相究明委員会CEHの活動が97年から始まった。CEHはグアテマラ政府に警察文書へのアクセスを要請するが「存在しない」と回答される。その8年後、市内ソナ6にある警察の敷地内で爆発事件が起こり、その調査がきっかけで、同じ敷地内の病院施設跡にあった大量の警察文書が発見された。人権擁護局が調査に乗り出してわかったものだ。そしてそれは首都中心部にある警察本部の地下室から秘密裏に移された物であることが判明した。CEHに対しその存在を否定したために隠匿する必要に迫られてのことらしい。

見つかったのは8千万部にのぼる資料で、1881年から1997年まで115年間にわたる。保存状態の悪いものが多かった。ヨーロッパ共同体の支援により文書整理が始められ、スイスの警察文書保存の専



警察歴史文書館



門家を招いて国際基準を満たす整理・保管の作業が始められた。資料は膨大なので、1965年から85年の期間をまず優先することになった。また、文書は時間順だけでなく警察組織別に整理された。

例えば犯罪学調査部門管轄では9万5000の分類カードがあり、その一つ一つに、調査対象となった氏名、ID番号、調査の内容などが記入されていた。このように整理されたデータをデータベースにすると、120万人の氏名があることがわかった。これはこの時期のグアテマラの成人人口の4分の1にのぼる数で、それだけの人びとが警察から見張られていたことになる。1979年に殺害されたマヌエル・コロン（グアテマラ・シティの市長を務め、野党の有力なリーダーだった）は殺されるまでの20年間尾行・監視されており、その一挙手一投足が記録されていた。

キューバ革命の英雄、エルネスト・チェ・ゲバラはキューバに行く前にグアテマラにも滞在したが、やはり警察に監視されていたという。私たちはこのゲバラのカードも見せてもらった。

共同作戦センターに関わる資料では、警察が軍の下部組織として動き、市内で容疑者を逮捕して軍に引き渡していた事実なども明らかになった。また、警察内の秘密拷問センターで、拉致した人びとを拷問し殺害した後、「身元不明死体」として市の共同墓地に埋めていたことなどもわかった。（注2）

また、2万3000冊におよぶノート（綴じてあるも

の)もあり、これらには主に総務関連の記述があった。このような記録は過去の人権犯罪(特に行方不明事件)の究明に役立つ。例えば、いつ誰にどの車両を手配したかなどが記入されており、ある人物が拉致された日時と目撃されたナンバープレートが一致すれば、警察によるものと特定できるわけだ。

警察歴史文書館の作業は、まず保存状態の悪い文書の回復作業から始まる。次にその整理。内容と、誰が使用したか、誰がしまったかなどを確認し、保存されていた順番に従ってしまう。さらに整理が終わった文書は一般公開され、希望者が閲覧できるようにする。最後に文書のデジタル化。作業が始まってからこれまでの8年間に200万ページあまりがデジタル化されたという。デジタルデータはスイス政府との協定で、4カ月に1回コピーをとり、それをスイス大使館に渡し、そしてそのコピーは最終的にスイスで保管される。

文書館の役割と存在意義は、1. 真実を知る
2. 歴史的記憶の再構築(証言、遺体の発掘、国家文書)
3. 正義を得るための手段(有罪判決の証拠)として貢献することだ。整理が終わった文書の公開は2009年1月から始まった。2008年に情報アクセス法(人権侵害に関する情報は公開されるべきというもの)が成立した後のことだ。以来今年8月までに9070件の閲覧申請があり、2万4514の文書を提供している。そのうちの35%は検察からの申請だという。文書館の中に検察の出張所があり4人が常駐している。また2302人の行方不明者の家族が訪れて閲覧し、その80%は調査に役立ったという。

不存在とされていた膨大な警察文書が偶然に見つかり、今それが内戦中の人権侵害事件の真相を暴くのに役立っている。

この文書館がある建物は、1970年代に警察病院として建設が始まった。が、政権が交代し、完成しないまま工事が止まり、打ち捨てられていたという。それが膨大な文書の隠し場所選ばれたという

わけだ。その文書が隠されていた建物が、今は文書館となり、整理・分析、デジタル化などの作業もここで行われている。文書の整理を進めるうちに、建物内に拷問センターが作られていたこともわかった。1階の中央部に四方をブロックで囲み、出入り口は小さなドアが一つあるだけ。調査を進めるうちに、それが悪名高い「ラ・イスラ(島)」であることがわかった。それまで関係者以外はどこにあるのか知られていなかったものだ。この「ラ・イスラ」はそのまま保存されている

この文書館は現在は中米文書館の一部となっており、内戦の歴史と文書館について広く知ってもらうために常時見学者を受け入れている。

注1 ス페인大使館占拠事件 1980年1月 農民統一委員会CUCのメンバーが農村部の人権侵害を国際社会とグアテマラ社会に訴えるために首都のスペイン大使館を占拠した事件。警察・治安部隊が出動し、スペイン大使の制止にもかかわらず砲撃。建物は炎上した。中にはスペイン大使を含む大使館関係者もいた。これにより36人が死亡。大使は重傷を負った。CUCの生存者が1名おり、病院に運ばれたが、そこから拉致され拷問死体で後日発見された。スペインはこの後しばらくグアテマラと国交を断絶した。占拠を指導したリーダーはノーベル平和賞受賞者リゴベルタ・メンチュウの父親ビセンテ・メンチュウ。

注2 ラ・ベルベーナ墓地 2011年にグアテマラ法医学基金FAFGによりこの墓地内にある六つの共同墓地が発掘された。最大のもは直径4メートル、深さ25メートルあった。合計1万4000体の遺骨が発掘された。

「天然染色研修センター・グアテマラ」 いよいよ開所

村岡貞夫

RECOM会員の皆様、如何お過ごしですか？

こちら毎日が雨、土砂崩れなどが頻繁に発生する雨季後半のグアテマラから天然染色研修センターに関するレポートをお届け致します。

2013年8月30日、地元マヤ人、日本大使館、携わった日本人ボランティア、スペインNGOアンダルーサなど、実にたくさんの人々が待ちに待った天然染色研修センターがサンティアゴ・アティトラ市チュクムク3地区(2005年の台風被害復興支援で整備された新興住宅地)の一角にいよいよ誕生しました。選挙による市役所体制交代の影響をもろに受け、建物が出来てから開所に到るまで、驚くべきことに一年半以上要して(ほぼほったらかし)のオープンです。

もともとは選挙に敗れた市役所旧体制が仕掛けたプロジェクトで、2012年年頭から新体制に変わり、旧体制プロジェクトに対するモチベーションが一気に下がるのはグアテマラ流であり、のらりくらりともいえる市役所関係者の萎えた気持ちを改めて高めていくために何度も足を運ぶこととなります。

また、この間、JICAからの資金援助獲得を目指し申請をしましたが、プロジェクト内容に対する

一定評価をいただきながらも、諸般の事情により断念を余儀なくされ、その他まったく進捗感がないまま2013年を迎え、事が一気に進みだしたのは、草の根資金出資者である日本大使館の動きが活発になってからのことでした。追い打ちをかけるように、研修所の建設アイデア発案者で、メソアメリカ天然染色研究家・児嶋英雄氏の「手弁当でけっこう……」といった強力な協力宣言なども頂戴し、5・6月、開所準備のための現実的で実りあるミーティングを行うことになりました。

7月2日、天然染色研修センターで働くことを前提とした指導者育成のための2カ月に及ぶ研修会が開催されます。校長先生として児嶋英雄氏、助手にRECOMの石川智子氏と私、対象者はサンティアゴ・アティトラ在住のスペイン語会話が堪能で、読み書きができて、ある程

度の基礎教育を受けた15歳から30歳の男性2名、女性8名となりました。

月曜日から金曜日までの週五日制、午前8時半開始の授業としましたが、お国柄、時間通りに始まることは皆無、ぼちぼち集まったところで始めて、テーマとなる原料および色を仕上げた段階で終了としました。また、校長先生による直接指導は2週間と



(上)開所式での指導者研修の生徒の集合写真 (下)研修生を指導する児嶋さん

ちょっと、その後、師の体調不良のため、3週目からは助手主導による指導が始まります。そして、グアテマラの基礎教育レベルの低さに愕然とすることになります。

「50%?」「ccって単位?」「30倍?」「還元?」「酸化?」これらは全て研修に参加した生徒たちの疑問点です。当然ながら「物質Xが水1Lあたりに10g必要とするとき、水10Lの場合物質Xは何g必要となるか?」という問いが解けない生徒がほとんどであり、算数の基礎から教えなければならぬのが常となりました。なるほど、以前、別の地域で指導に携わった際にしっかり学習できた人は極々一握りであった現実を思い出します。また、JICAプロジェクトの一つとして、多額予算と莫大なエネルギーを要した「グアテマラ算数プロジェクト」なるものがありますが、その必要性を痛感せずにはいられません。余談ですが、そのプロジェクト「グアテマティコ」が取り組まれて数年たった今、生徒の算数能力は以前よりも上がったかという、いえいえ、はっきりと落ちてきているという現実と直面していることも、あえて付け加えておきましょう。

さて、助手2人による天然染色指導者育成研修、算数や化学記号、用語などに苦しみながらも、幾度も同じことを繰り返すことによって生徒たちの染色技術は向上していきます。教育学の世界では2割優秀、6割まあまあ、2割不十分の生徒習熟度が常だそ

うですが、ほぼ同様の結果が得られました。そして、知識・実技共に十分な優等生も誕生しました。

とても喜ばしい研修結果です。

紆余曲折を経ながら、満を持して開所した感のある天然染色研修センターですが、実際には銅媒洗の汚水処理設備（日本人専門家を通し、具体的処理設備提案済み）、染色に使用する道具類、染色原料・助剤調達、今後の具体的運営計画、資金の目処、それらほとんどの対応が遅れている状況です。

また、個人的には、プロジェクトの運営資金を持たずして、これ以上の無償ボランティアを続けることが不可能となりました。従いまして、施設開所、指導者育成という一粒の種を撒くことができたという事実をもちまして、今後すべての取り組みをマヤ人に預けることにして、今後は静かにそっと遠くから応援していくことと致しました。

果して、3年後、10年後、20年後、50年後にはどうなっているのでしょうか、とても楽しみな事柄の一つです。そして、皆さま

のこれまでのご声援に対して、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。今後、変わらず温かく見守っていただけることを願っています。また、ご近所にお寄りの際は是非訪ねてみて下さい。



(上)染色の訓練の様子
(下)生徒による説明の練習

ニカラグア便り(2) 学校選びは難しい

田中紀子

ニカラグア（以下「ニカ」とします）の学校のサイクルは、1月が年度の変わり（実際の始業は2月ですが）、終業は12月上旬です。長男が10月で満6歳になり、来年の2月からは小学生として学校に通うこととなっています。既に、ある学校に仮入学手続きをしました。この学校に決めるまでのいきさつについてお話したいと思います。

ニカで外人として生活して長くなりました。若気の至りで来た時はほとんど怖いものなしでしたが、年を取ると慎重さのようなものも身につけてきて、子どもを公立の学校に入れる気にはなりません。校内及び学校の周辺地域での暴力や盗難などの身の安全の危険に晒される確率が公立校は高く、またインフラなどの学習環境があまり整っていないからです。公立校の方がいろいろな意味で鍛えられるから将来しっかりした人間になるのでは、という公立育ちの夫の助言もありましたが、自分が育った環境とはかけ離れたところに入れるのはやっぱり怖かったです。しかも知り合いの話を聞くと、どうも公立校は「昔は」教育レベルが高かったけれども、今はだめ、のようで（教師の給料がニカラグアは中米で最低レベルであることから当然の話かも）、さらに、私が個人的に公立校が気に入らないのは、生徒たちに洗脳に近いことをやっている現政権の政党色が強くなっているということです。

ニカの私立校で多いのは、カトリック系の学校です。私は宗教の教えを受けて欲しいとは思いませんが、教育法が良いとの評判を聞く学校にはカトリックが少なくありません。この国に生きる限り、宗教的影響を全く受けないわけにはいかないかと諦めて、この点は取り敢えず気にしないことにしました。

口コミ情報に頼るしかなく、まず、ある私立のカトリック系小中学校（A校）に行きました。立派な正門を車で入り、立派なキャンパスに何となくそわそわしながら総務部のようなところで入学情報を請求したところ「8月に仮入学手続きがありもういっぱいです」と言われました。金持学校だと分かった

ので、もう無理と聞いてほっとしたようなすっきりしたような諦めを感じつつ、他の学校もすでに仮入学手続きを締め切っているのではと新たな不安と焦りを抱えてその学校を後にしました。

その勢いで、別のカトリック系の学校（B校）に行きました。普通のスペイン語教育コースは満員でバイリンガルコースしか空きがありませんと言われました。日本語を少しでも学んで欲しいと思い一生懸命日本語を吹き込んでいるのにさらに英語だなんて勉強自体も大変だし、私的には子どものアイデンティティが心配のため気が向かず、さらに、必要書類の中に「品行方正証明書（通っていた幼稚園に出してもらおう）」と「洗礼証明書」とあるのを見て、退散しました。

午後は、数学教育が良いと聞いた別の学校（C校）を見に行きました。よく知らないまま入ると、カトリック聖人の像などが描かれているのが目に付き、あらら、と思いつつ、必要書類に目を通すとやっぱり「洗礼証明書」「品行方正証明書」がありました。でもどうせ宗教的でない学校を見つけるのが大変なら、せめて教育方法が充実しているところが良いと思い、ここに決めようと思いました。「洗礼証明書はどうしても必要ですか？ 私は外人でカトリックじゃないんですけど、教育方法が充実しているこちらに入れたいのですが」と言ったら、なくても大丈夫との予想通りの答えでした。あちらでお金を払って戻ってきてと言われ、会計の方に足を向けながら、「でもここは家から遠すぎる、しかもカトリックか…」と再び頭の中で渦が巻き、会計に向かう足が勝手に駐車場に向かいました。

その近くにあるプロテスタント系の学校（D校）が比較的教育方法も良いと聞いたので行ってみたところ、もう午後のため半分閉まった状態。駐車場もよく分からず、中米で最大と言われる闇市場の近くで、ちょっと物騒な地区にある学校の外に駐車するのは躊躇され、諦めてその日は退散しました。

そんな話を子どもの歯医者さんにしていたら「無宗教の私立の学校で薦められるのがあるわよ」（E

校)。比較的、我が家にも近く、キャンパスの雰囲気も良く、校長、職員も親切で、校長室にあったマリア様の像がちょっと気になったけれど、必要書類に洗礼証明書はなく、決まり!! としました。10月から仮入学受付なので安心して帰りました。ところが、別の知り合いと話をしていたら「娘の1人がその学校で勉強したけど、無宗教とは建前だけ。実はかなりのカトリックで、宗教に関する宿題があったりして、親も巻き込まれるから大変よ、しかも数学の教育法が弱いよ」と。ああ、また振り出しに戻ることに、と頭を抱えました。

いろいろな人と話しているうちに、英語は今どき学んでおいて損はないし、英語を学んだからと言って必ずしもアイデンティティが歪む、というものはなく、家での教育などがしっかりしていれば心配する必要はないかと、まあ、やってみなければ分からないとも思い直し、その点もオーケーとし、選択の幅を広げました。

電話帳などで、ふと目に付いた学校(F校)が、名前からして無宗教、位置的に悪くないと思い、電話したところ、「マーケティング課」に回され、必要書類等をメールを送ってくれました。宗教校でないことは確かなので一応見に行きました。「マーケティング課」のお姉さんに、「ここは(欧米と同じ)で)9月授業開始、完全にバイリンガル教育です。なので、こちらにお子さんを入れるには、来年度にでも英語の一定レベルをクリアしないとイケないので、来年9月の前の準備コースに入れることとなります」といったことを聞きました。バイリンガルを「商品」とした、学校というよりは……うーんと唸りました。(こういう学校でバイリンガル教育を受けたら、子どものアイデンティティの問題が出るのは一目瞭然でした)

教育法と我が家からのアクセスの観点に絞り、再び、バイリンガルコースしか残ってなかったB校に戻りました。「洗礼証明書」に関しては「問題ありま



卒園式の記念写真

せん」との回答を受け、入学申請の手紙を置いて行ったところ、1週間後ぐらいに電話がありオーケーでした。ところが、その返答を待っている1週間の間に、やはりカトリック嫌いの夫が納得いかないのを見て、もう少しだけ他の学校を探す努力をすることにしました。

誰かに聞いた記憶からインターネット等で調べて、我が家からかなり近いところに私立学校(G校)があるのが分かり電話をしました(引っ越したばかりで近所のことを良く知らなかった)。まず、無宗教かどうかを

聞いたところ「ノー」。でも気のせいか言いづらそうな口調で「実はサンディニスタが創設に関わったのだけど、今は関係ありません」とのこと。見なければ分からないと、見に行きました。何度も前を通ったことのある、我が家からとても近い学校でした。質素な見た目からてっきり公立学校だと思っていたので対象外にしていたのです。でも、その質素さが逆に気に入りました。校長は教育に関して話しました。「この学校は、全ての生徒を受け入れます。従って、品行方正証明書は要求しません。社会にはいろんな人がいるわけで、生徒たちにもいろんな人と共存することを学んで欲しいからでもありません(従って政党問題も関係なし)。教師には、生徒は問題を抱えているかもしれないけれど、彼ら自身が問題ではないのだということを学校の方針として伝えてあります。この学校には他の学校で受け付けられなかった生徒もいます」

その他にもいろいろな話をしてくれましたが、ここは「教育」をするための「学校」なんだ、という印象を受けました。

そんな訳で、オーケーをくれたB校にはお礼を言いつつも、やっぱり無宗教の学校にすることにしましたとお断りし、やっと全てが決まり、ほっとしたところでした。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から

シピティオ

網野真木子

今回は、エルサルバドルの人びとのあいだで語り継がれてきた愛すべき存在「シピティオ」をめぐるお話をしましょう。

シピティオEl Cipitíoという名は、ナワ系言語で子どもを意味するCipitからきており、そのとおり子どものような背丈です。シグアナバという女性が夫への裏切りを神に罰せられさまよう身となる伝説の中で、置き去りにされた息子シピティオも罰として永遠に成長をとめられたといわれます。彼の特徴は小さな身体だけではありません。突き出たおなかにつばの

広いとがり帽子、そして正面から見ると後ろ向きに立っているように見える、つまり足が反対向きについているというのが大方の説です。面白いことに、ドミニカ共和国のシグアパやブラジルのクルピラなど、ラテンアメリカには、追いかけていく人を惑わせるような足跡をつける、同じ仲間がいます。シピティオは神出鬼没の超能力を備えているともいわれ、森に住み、川べりで遊ぶ子ら（とくに若い娘）をからかったり、夜になると台所に忍び込んで灰を食べたり、屋根に小石をぶつけて子どもを遊びに誘い出したり、何かと悪戯好きですが、邪気は少ないようです。先日、エルサルバドルから来日したカステジャノスさんが東京の子どもたちに昔話を語ってくれる機会がありましたが、そこに登場したのは、「マタテロ、テロ、テロ…」と呪文を唱えて悪い人を石に変えてしまうシピティオでした。

さて、いま私の手元にはシピティオを題材にした2冊の絵本があります。その1冊、エルサルバドルを代表する作家マンリオ・アルゲタの『El Cipitío』(2006)は、無邪気な姿のシピティオを森の豊かな動

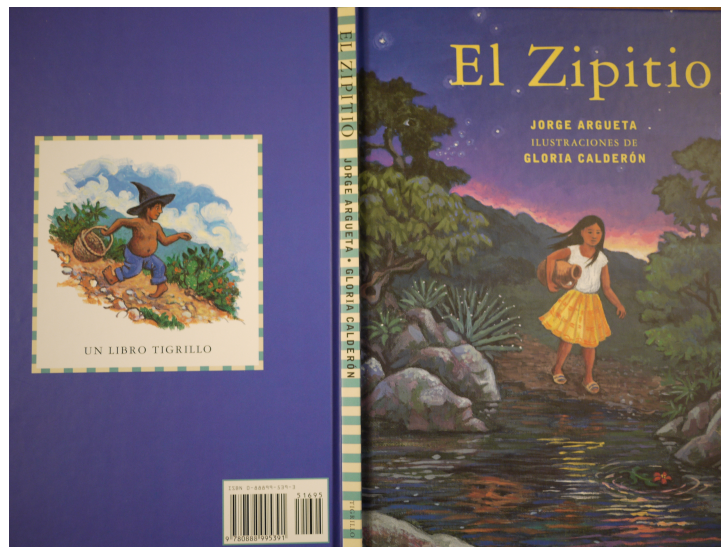
植物とともに描き出しています。シピティオのことを子ども向けに書き残そうと思い立ったのは、自らのアイデンティティを意識したときに自然と生まれたアイデアだった、と彼は語っています。

もう一冊は、エルサルバドルからアメリカに移り住んだ詩人・絵本作家であるホルヘ・アルゲタの『El Zipitio』(2003)です。この本のシピティオは少々趣がちがいで、大人になろうとしている少女の前に現れて、愛をささやく存在です。少女フィーナは母親からまもなくシピティオが現れると聞かされ

て、不安でいっぱいになりますが、母親はシピティオを怖がってはいけないこと、彼が現れたらどうすればいいかをこっそり教えてくれます。一種の誘惑者と受けとれそうな性格もまた、語り継がれてきたシピティオの別の一面かと思われそうですが、作者は、そんなシピティオに対し少女がいかにかふるまうかをテーマにしています。結末で、「海の波をとってきて」と頼まれたシピティオは、渡されたカゴを大喜びで受けとると、海へ向かって走り出し、二度と姿を現さないのですが、そこには作者独自のユーモアや若者への温かな眼差しが感じられます。

1990年代には現代の町を舞台にした実写版「シピティオの冒険」がつくられ、今もテレビで新シリーズを放映中とのことですが、シピティオをめぐるものがたりは今もたえず新たに紡ぎだされ、子どもたちの楽しくひそかな交流は続いているようです。

Argueta, Manlio "El Cipitío", Editorial Legado, 2006
Argueta, Jorge; Calderón Gloria (ilus.) "El Zipitio",
Groundwood Books, 2003



第69景 キューバ外相が東京でフィデルの話 を紹介

キューバのブルーノ・ロドリゲス外相は、メキシコと中国を訪問した後、11月7日から9日まで日本に滞在した。東京で8日、安倍首相、岸田外相、志位共産党委員長らと会談し、日玖友好議員連盟、日玖経済懇話会とも会合を持った。

帰国に先立つ9日には朝日新聞とNHKのインタビューに応じた後、在京大使館で、少人数の日本人および在日キューバ人との懇談会に出席した。懇談会の質疑応答での外相発言はすべて非公式とされた。

外相は外遊前後に「革命の指導者」フィデル・カストロ前国家評議会議長に外交状況を必ず報告することになっており、今回もメキシコへの出発前の11月3日フィデルに、国連総会での米国による対キューバ経済封鎖の撤廃決議可決などについて報告し、訪日目的についても説明した。

外相によると、その際、フィデルは「私は元気だが、士官候補生のように頑強でなくなった」と語った。フィデルは核兵器廃絶に力を傾けており、2003年3月の2度目の訪日の際、広島を訪れた思い出を外相に懐かしそうに話した。フィデルは日本への愛を抱いているとも述べた。

フィデルはまた、かつて気候変動に関する国際会議に出席し「人類滅亡の危機」に警鐘を鳴らしたが、「あれは少し大げさだったかな」と言ったという。

前議長は、世界の食糧生産の問題にも取り組んでいる。人口過剰に鑑み、植物性蛋白質の生産に取り組むべきであり、また穀物は家畜の餌にするのではなく、人類だけのために使うべきだ、との考えを外相に伝えた。アセローラをも重要視しているという。

フィデルは、少年のように好奇心旺盛で、どんなことにも細かく質問する。数字などデータに疑問を抱きつつ質問する。

ロドリゲス外相は安倍首相との会談について「生産的だった」と評価した。首相から北朝鮮による拉致問題の解決への協力を求められたことについて、「これについては何も話せない」と断りながらも、「早期に正当で名誉ある解決が得られるよう期待する」と述べた。

来年は支倉常長のキューバ到着400周年に当たり、玖日双方で記念行事が催される。これにも触れ、歴史、相互敬意・称賛、将来展望などがテーマになると述べた。

来年秋の国連安保理非常任理事国アジア枠に日本は出馬するが、これについて外相は「キューバは票を取引の材料にはしない」と強調した。だが「国際機関の場で相互に協力し合うことは可能だ」と含みを持たせた。

外相は、日本の医療機器が摂氏-16℃から+45℃まで機能することが2005年のパキスタン大地震の際の救援活動で確認されたと指摘し、優秀さを評価した。外相は当時現地でキューバの救援活動に参加していた。最近キューバ人医師6000人がブラジルに派遣された。数年間、各地で医療活動に従事するが、日本製医療機器を用いているという。

【参考：月刊「LATINA」12月号（11月20日刊）の伊高執筆記事は「モンロー宣言190周年」】

音楽三昧♪ペルーな日々 (第52回)

ペルー・ロックの曙(その1)

今回は、日本ではほとんど知られていないペルーのロックについて少し紹介してみたい。恥ずかしながら私はロックに関してあまり詳しくない人間なので、もしかしたら少々トンチンカンな記述もあるかもしれないが、そんな私なりにでもこの多様なペルーのロック世界を少しでも紹介できればと思う。

ロック・エン・エスパニョール(スペイン語のロック)といえば、なんといっても本場はアルゼンチンだ。軍政時代にフォルクローレやヌエバ・カンシオンが弾圧される中、ロックだけはガス抜きとしてある程度許容され、若者たちはロックの中に彼らの言葉にできないさまざまな思いを込めて歌い続けたという歴史がある。

このアルゼンチンの壮絶なロックの歴史がやがてラテンアメリカへと広く波及していき、90年代、ラテンアメリカにロック・エン・エスパニョールの風が吹く事になる。そんな中で、ペルーでもまずは中産階級の若者たちからロック・エン・エスパニョールのバンドがブレイクし始め、やがてそれが次第に低階層の人々へも広まっていった。今回は、ロックが規制対象であった70年代末までのペルーのロック・エン・エスパニョールのブレイク前夜に絞って紹介したいと思う。

アルゼンチンがラテンアメリカにおけるロックの大御所とは言え、ロック・エン・エスパニョールの初めの萌芽はペルーもアルゼンチンに劣らず古かったようだ。映画を通じてペルーに入ってきたと言われるロックは、ジーンズやバイクなどの新しいシンボルと共に中産階級の若者たちに最先端の音楽として非常に魅力的なものとして映ったという。やがて彼ら自身によるその実践の萌芽は、首都リマのミラフローレス地区とカヤオから始まった。

はじめにペルーのロック史に名を残したバンドとして挙げるべきは、ガレージ・ロックのパンク・バンド、ロス・サイコスだろうか。1964年に結成され、ラテンアメリカでも最も初期にスペイン語でオ

リジナルのロックを歌ったバンドである。活動期間は2年間と非常に短かったが、ペルーのロック・エン・エスパニョールの歴史はここから始まったと言って過言ではない。しかし、ロック・エン・エスパニョールの市場が認知されるのは実際にはもっと後の話だ。当時は英語のロックをコピーするのが主流であり、ガレージ・ロック、サイケデリック・ロックなどが一部の若者たちの中で流行している状態であった。

では、当時のロックの主流であった翻訳ロックの筆頭株はというと、65年に結成されて今なお多くのファンがいるロス・ドルトンスであろう。このバンドは70年代を通じて多くのファンを獲得したポップよりのロックバンドと言えいいだろうか。名前のドルトンも、ベンチャーズのレーベルから取っている。またこのバンドは、66年以降、ボーカルの日系人セサル・イチカワを中心に黄金時代が築かれたバンドである。彼らの代表曲を挙げるなら、J.フランク・ウィルソンとキャバリアーズの歌で大ヒットした「ラスト・キス」だ。彼らのバージョンではもちろん「ウルティモ・ベソ」とスペイン語化されて歌われていた。また面白いのは、セサル・イチカワがいたからかどうだかは分からないが、加山雄三の「夜空の星」が「ウナ・エストレージャ・エン・ラ・ノーチェ」とスペイン語で歌われたりもしていることだ。このバンドは現在も存続しており、今のボーカルも面白いことに日系人のキケ・ゴヤ・ヒガが務めている。

このようにペルーでは、順調にロックが社会的に認知されていきつつあったまさにその時期に、国を揺るがす大事件が起こった。それは68年の軍事クーデターである。ベラスコ将軍がペルーの資源政策に異議を叫んでクーデターを起こして軍事政権を設立、以後10年を超える軍政時代へと突入したのだ。特筆すべきは、他の多くのラテンアメリカ諸国が右派の軍政時代を迎えていた中、ペルーの軍政が左派

であったことだ。それ故、例えばアルゼンチン軍政が「フォルクローレ」を禁止しロックを許容したのとは逆に、ペルーではロックがメディアから締め出されるなど半ば禁止され、クリオーヤ音楽やアフロペルー音楽、ワイノなどが奨励されることとなった。そのため、ペルーのロックにとって70年代は冬の時代とも言える時代であった。

しかし、この70年代はペルーから初めてロックのスーパーバンドが登場した時代でもあり、初の海外公演やフュージョンロックなどが始まった重要な時期でもあった。

この時代のもっとも重要なバンドはなんといってもサイケデリック・ロックのバンドとしても有名なトラフィック・サウンドだろう。67年に結成され、69年のセカンドアルバム以降オリジナルの作品で大きな影響力を發揮し、71年にはペルーのロックバンドとして初めての海外公演としてアルゼンチンやブラジル公演を実現した、まさに歴史に残るバンドなのである。残念ながら72年に解散してしまうが、ペルー初のスーパーバンドとして今なお多くのファンがいるバンドだ。ちなみに代表曲は敢えてこの時代に英語で歌われた「メスカリーナ」だ。

また、60年代末から活動を開始し70年代に大きな影響力を持ったバンドでもう一つ忘れてはいけないのがエル・ポレンだ。「花粉」を意味するバンド名を冠するこのバンドは、ペルー初の本格フュージョン・ロックのバンドと言っていいだろう。チャランゴやバイオリン、ボンボ、ケーナなどのアンデス・アコースティック・サウンドを駆使しながら描かれる彼らのアンディアン・ロックの世界は、紛れもなく新たな地平を切り開いたと言える。また72年のファーストアルバムのタイトルが「チョロ」というからすごい。このチョロとは都市へと移住してきた先住民系の人を指すある種の蔑称だ。この時期、チョロがペルー社会の中で徐々に台頭してくる直前の時代であることを考えるとまさに時代を先取りしたタイトルとも言えるだろう。そして73年のセカンドア

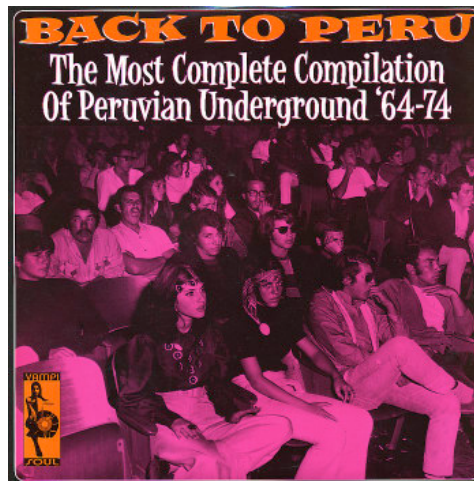
ルバムのタイトルが「街の外」。タイトルからも見えてくる彼らのその絶妙なポジション取りが、当時のロックのおかれていた状況や先住民への差別と搾取の状況などと重なりまさにいろいろ考えさせられる。このようなフュージョン・ロックで他に70年代に活躍した代表的なものにエル・オピオというバンドもある。アヘンというちょっと危険な意味を持つ

このバンドはよりハードロック寄りのフュージョン・バンドだ。

ハードロック・バンドとして活躍した有名な70年代のバンドを挙げるならその筆頭はなんといってもボックスだろうか。このバンドも多くのファンを獲得し、今なお伝説に残るペルーのロックバンドである。ハードロック・バンドとしては他にタルカスも人気があったバンドである。

また、ラテン・ファンク・バンドとして忘れてはならないのがブラック・シュガーだ。このバンドはなんといってもジャズとラテンのテイストを絶妙にミックスした哀愁漂うサウンドが素晴らしい。ちなみに余談になるが、後にアフロペルビアン・ジャズを牽引するリッチー・セノンもこの頃はロック・ギタリストとしてエル・アイユというロック・バンドで活躍していた。

以上、ペルーのロックについて、ロック・エン・エスパニョールを中心に英語で歌われたものも含めて、その草創期の60年代から不遇の国粋軍政時代の70年代までを駆け足で見してきた。日本では知られていないペルーのロックも想像以上に多様で奥深いことを感じていただけたなら嬉しい。なお、80年に軍政から民政移管されると、これまでの規制の反動か、ペルーのロックは一気に花開き、それが90年代の大波を準備する形になる。次回はぜひ80年代以降のペルーのロックについて紹介できればと思う。最近はこちらのCDもネットでかなり入手しやすくなってきているので、ちょっと興味を持ったバンドがあればぜひ積極的に聴いてみて、気に入れば布教して頂ければと思います。(水口良樹)



牛肉のピーマン（パプリカ）炒め

Carne de Res (de vaca) al Pimiento

寒さが募り、体が肉を欲する季節です。今回は、簡単でとてもおいしい料理を紹介します。

私がまだ学校に通っていたころ、私たち兄弟が学校から帰宅すると、忙しいときの母は「パン屋でフランスパンを買っておいで!」と言いつけ、時には、私たち兄弟も夕食の米飯を炊くのを手伝わされた。母がつくる料理は、簡単なものでもおいしくて栄養たっぷりでした。

ソンリサ131号で、今回とそっくりのレシピをのせています。そのときは豚肉でしたが、今回は牛肉を使います。

家族みんなが疲れている一日の終わり、おいしい夕食を準備するため、冷蔵庫から牛肉と野菜、その他の材料を取り出します。肉がやわらかくなるから消化によく、幼子からお年寄りまでだれもが間違いなく気に入ってくれるでしょう。

不意の来客や子どもの昼の弁当のために、材料を冷蔵庫に常備しておいても便利です。



パーティの時には準備が簡単で、だれもが喜んで食べてくれます。もちろんベジタリアンの人は除きますが。

ユカタン半島のマヤの人たちもこの料理をつくっています。ユカタンでは、緑のピーマンや色とりどりのパプリカを「甘い唐辛子 chile dulce」と呼んでいます。

さっそく料理して、フランスパンかご飯と一緒に食べてみてください。

.....

■材料 4人分

- ・牛肉（細く切ったもの）400グラム
- ・タマネギ中 1個
- ・ほんの少しの白コショウ
- ・ウスターソース 大さじ5杯
- ・サラダ油 大さじ1杯

■作り方

- 1) ピーマンの種を取り除いて切る。細切りでも輪切りでもお好みで。

- 2) タマネギの皮をむいて、細長く切る。
- 3) 牛肉は、長さ5センチ幅2センチ程度に細長く切る。すでに切られた肉を購入してもよい。
- 4) フライパンに、サラダ油をしき、あたためてからタマネギとピーマンを入れて弱火で3分間ほど炒める。それから、細切りにした牛肉を加え、肉の色が変わるまで中火で4分間ほど炒める。
- 5) ウスターソースとコショウをほんの少々加える。肉がソースを吸ってしまうまで弱火でさらに炒める。
- 6) フランスパンか米飯とともにどうぞ。

ハイチー現代に存続する奴隷制

ほぼ世界中で奴隷制が禁止されているにもかかわらず、いまだに3000万人ほどの人々が債務奴隷や、強制結婚、児童の売買、強制労働の犠牲になっている。今年の10月17日にオーストラリアのWALK FREE財団が出した世界奴隷指数によれば、世界で奴隷状態におかれている人びとの3.8%にあたる110万人が中南米・カリブ地域にいる。162カ国のランキングは奴隷状態が人口に占める比率と児童結婚、国内外の人身売買の3分野から割り出した。それによると、ハイチはモーリタニアに次いで第2位、1020万人の人口のうち20万人から22万人が奴隷状態にある。長い間政府が機能していなかったのに加え、奴隷や搾取の長い歴史、現在の環境危機による貧困化もあって、奴隷状態におかれる人びとが増えている。また、社会サービスを受けられない、人身売買の危険性を知らないなどでレスタベックと呼ばれる児童労働のシステムが広がっている。レスタベックは農村部の貧しい子どもが都市部の裕福な家庭に働きに行くというもので、そもそもは極貧状態の子どもに食べ物や住む場所を確保するための家族の連帯の形態であった。が、今はそれが崩壊し、30万人から50万人の子どもが搾取されており、多くが食事や水、寝る場所もないというひどい状況におかれているほか、肉体的精神的な虐待も常に受けている。(Noticias Aliadas 2013/10/24より)

ブラジル この1年でアマゾン森林が30%消失

ブラジル政府によると、今年のアマゾン熱帯雨林の森林消失が昨年比べて30%増えている。環境活動家からは、森林保護法の改悪のせいだとしている。最近の研究ではアマゾンの森林消失はアマゾン地域にとどまらずアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイの近隣国を含む数千キロメートル四方に及ぶ広範な地域に降雨量の減少をもたらすという。この調子で森林消失が続くと2050年には乾期の降雨量が現在より21%減ると計算され、これらの地域に住む人びとに深刻な影響を及ぼすことになる。(BBCMundo.com 2013/11/14より)

チリ総選挙 学生運動リーダーが国会議員に

11月17日にチリで総選挙があった。大統領は元大統領ミシェル・バチェレが第1位だったが、過半数を取れなかったために12月15日に上位2名の決戦投票が行われることになった。2位のエベリン・マテオとは大差があったためバチェレが当選することは確実視されている。

今回大きな注目を集めたのが、学生運動のリーダーらが国会議員に当選したことだ。カミラ・バジェホ、ガブリエル・ボリック、ジオルジオ・ジャクソン、カロール・カリオラの4人が当選した。チリ学生運動は2011年に教育費を無料にするよう要求して始まり、貧富の差や教育へのアクセスの問題を追求して国中に広がった。今回の選挙でも教育費の問題は大きな争点の一つとなった。(BBCMundo.com 2013/11/18より)

ラテンアメリカ—狭まるジェンダー・ギャップ

世界経済フォーラムが発行する「グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポート」の、各国の男女格差を数値化するレポートによると、相対的にラテンアメリカはジェンダー・ギャップが小さくなっている。今年10月に発表された2013年ランキングでは、中南米で最もギャップが少ないのはニカラグア(世界10位)。ジェンダー・ギャップは経済(収入、専門性と役職など)、教育(基礎教育と高等教育へのアクセス)、政治的エンパワーメント、保健の4分野で判定。ラテンアメリカは2006年から13年の間にギャップが6%改善された。とりわけ昨年からの2年で他の地域に比べて改善が目立っている。ニカラグアの次はキューバ(15位)で専門職を持つ女性の割合は最も高い。最低はグアテマラ(114位)。(Noticias Aliadas 2013/11/14より)

どんよりと暗い輪島の冬ですが、食卓はひとときわ華やかです。1杯400円の香箱がに（雌ガニ）は、卵やミソがたっぷり。「おすそわけ」される脱皮したばかりの水ガニ（ズワイガニ）は味噌汁にぶちこみます。延縄で釣って2時間後に水揚げされるタラはおそらく日本一おいしい。白子の天ぷらや鍋はもちろん、刺身はもちもちとした歯ざわりで甘みが口中に広がります。糠とイシル（魚醤）に1年以上漬けたサバやイワシはお茶漬けにぴったりです。

朝市は、ロシアのカニやら九州のノドグロといった他産地の商品も少なくないのだけど、輪島で揚がった魚（日本海が荒れる冬は富山湾の魚も扱うが）に頑固にこだわりつづけるばあちゃんもいます。

日本のほかの地域とは大きく異なる独自の食文化を受け継ぐ能登のおばちゃんを見てみると、グアテマラのマヤの女性を思い出します。世界農業遺産（GIAHS）に指定された能登のばあちゃんたちは、日本の先住民族と言えそうです。 （藤井満）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|------------------------|------------------------|
| Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今 | Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 |
| Vol.144 ブラジル・家族農業の危機 | Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 |
| Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判 | Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 |
| Vol.142 サパティスタの新しいサイクル | Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ |

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
 TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
 FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

103万8239円

<グアテマラ基金>

54万6172円

(2013年11月現在)